



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部

東京都世田谷区瀬田 4-16-1 Tel 03-3708-0222

主日のミサ／午前7時、午前9時半



## 「最近思うこと」—共に住む、共に在ること—

清永 俊一 神父

時々、「バス通り裏」という昔の連続ドラマのことを思い出す。この昭和30年代にNHKで放送された番組のことを覚えておられる方もいると思う。当時、私の母親と姉がおしゃべりしながらにぎやかに観ていました。私は、その頃、小学生だったので大人の日常生活に興味はなく、母や姉の笑い声や話し声を耳にしながら、何か別のことをしていたのでしょうか、話の内容は、私の記憶に残っていません。おそらく隣近所に住んでいる人たちの人間関係がテーマだったように思う。母や姉がそんなドラマを毎回、興味深く見ている姿を見て、何が面白いのだろうか、当時の私は理解できなかった。

それにもかかわらず、その番組の前後に毎回流れた主題歌が、今でも、断片的であるが、なぜか私の耳に残っている。ウィキペディアで歌詞を調べてみた。以下のものであった。このドラマに登場する人々の「平凡さ、つましい生活、身近な戯れ言や小言などの日常生活が多くの視聴者の共感を得た。」と記されている。人気のドラマだったようだ。あの「バス通り裏」のドラマの登場人物たちは、どんなことに泣いたり笑ったりしていたのであろうか、と今（七十一歳になってしまいました）になって思う。歌詞を見ながら、優しいまなざしをしていた今は亡き母親を思い出した。

小さな庭をまんなか、おとなりの窓、うちの窓、いっしょに開く窓ならば、やあこんにはと手を振って、こんな狭いバス通り裏にも、僕らの心は通いあう。

小さな花をまんなか、おとなりの窓、うちの窓、むこうが閉じた窓ならば、なぜだろうかと振り返る、こんな狭いバス通り裏にも、目にしむ煙が流れる。

その後の私は、それまでも増して孤独を好むようになり、友だちと共に遊んだり騒いだりすることから少しずつ遠ざかり、人間や社会をできる限り敬遠し避けようとした私であったが、二十歳を過ぎた頃にキリスト教の洗礼を受けた。そしてその数年後に、孤独を追求したいと決心し、フランシスコ会の修道生活の道を選ぶこととなった。今から思えば、孤独の生活と、それに相反するフランシスコ会の生活を選んだのは、不思議な気がする。フランシスコ会の生活は、兄弟共同体（フラテルニタス）だからである。

修道院は家庭や家族の人間構成とは異なっている。家族は、相互に選び合い納得して（神の前で誓約して）夫婦となり、そして子供たちが生まれ、家族を作る。しかし修道院のメンバーは、互いに選び合ってそのメンバーになったわけでもなく、相互に似たところも特になく、それぞれ異なる人生を経て修道会に入会してきた人たちである。修道会入会までの職業や考え方もそれぞれであり、性格も違い、年齢も違い、生物学的な遺伝子も共通したものではなく、顔も背格好もそれぞれである。唯一の共通点は、聖フランシスコを通して、イエス・キリストに誠心誠意従うということであろう。人間には知り得ない神の深い配慮によって集められた人たちによって、修道院が成り立っていることは素晴らしいことである。

カトリックの洗礼を受けたのは、当時の私に、自己満足的に孤独の中に一人で生きていくのではなく、同じ志を持つ仲間たちと、それこそ多分「バス通り裏」の登場人物たちのように生きることの素晴らしさを、イエス様は教えてくれたように思う。人生の大きな転換点であった。

ルカの福音書13章に「辛子種の喩え」（18節 - 19節）、と「パン種の喩え」（20節 - 21節）がある。「神の国は何に似ているか」とイエスは言う。「それは一粒の辛子種に似ている。……庭に蒔くと、やがて生長して木となり、空の鳥がその枝に巣を作る」。「神の国を何に喩えようか。それはパン種に似ている。……小麦粉の中に混ぜると、やがて全体が発酵する」。辛子種は庭に蒔かれ、庭の土の中に入り、庭の土と共にあるようになり、大きく成長する。パン種は小麦粉の中に混ぜられ捏ねられて、小麦粉の中に静かに入り、やがて全体がふっくらとしたおいしいパンになる。福音が私たちの生活の中で生きられるようになると、その福音はどれほど豊かに実を結ぶことになるのかを示している。

私が二十歳になる前の頃、久しぶりに田舎の実家に帰省した時のこと。私は一日中ゴロゴロして過ごし、母親の前でうっかりと「帰省したけど、田舎は退屈だな。帰省しなければよかった」と言ったら、母親がじっと私を見つめて何か言いたそうな顔をしていた。私は後で考えて、多分その時の母親は、「久しぶりに息子と一緒に過ごすことができ私は幸せよ、あなたがここにいるから幸せよ」と言いたかったのかなと思った。自分の考えの足りなさや自己中心の幼稚さに気がつき、反省させられた経験でした。家族と共にいること、愛する人と共にいることの幸せ。

待降節が近づいている。そして降誕祭も遠くない。私たちはクリスマスを迎える度毎に、人類を救おうとなさる神の意志の偉大さに改めて感嘆させられる。そして救い主イエス・キリストが私たちの救いのために一人の人間となられ、この世界に住まわれたという事実を、私たちが実際に祝うことができることは、なんと幸せなことであろう。救い主キリストは、「エンマヌエル」（神は私たちと共におられる）と呼ばれた。神は、私たち人間と「共にいる」ことを、それも特別の仕方「共にいる」ことを望まれた。救い主イエスは、マリア様から生まれ、実に私たち人間の一人となり、私たちと最後の最後まで、共にいてくださる。「私は代の終わりまで、いつもあなた方と共にいる」（マタイ28章20節）。しかし、このイエスの言葉の前には、次のような言葉が置かれていることを見逃してはならない。「あなた方は行って、すべての国の人々を弟子にしてください。父と子と聖霊の名に入れる洗礼を授け、私があなた方に命じたことを、すべて守るように教えなさい。私は代の終わりまで、いつもあなた方と共にいる」（マタイ28章19節 - 20節）。

クリスマスをお祝いすることは、共にいてくださるイエス・キリストを私たちが信じ、日々の生活の中でその信仰を生きることであり、そのことが救い主イエス・キリストの誕生を真に祝うことになるのです。今年のクリスマスも、そのようなお祝いの日でありますように。